

オーストラリア・クィーンズランド工科大学教員研修 《令和5年度研修レポート》

大阪府とクィーンズランド州は昭和63年の友好提携以来、青少年や教育分野などにおいて交流を行ってきました。その一環として、平成17年から府立学校の英語科教諭を対象に、クィーンズランド州内の大学が実施する英語指導法研修への参加プログラムを行っています。今年度は5名の先生方にご参加いただきました。先生方の研修報告の一部を抜粋・要約してご紹介いたします。

《令和5年度実施内容》

研修期間：令和5年7月21日（金）～8月9日（水）

研修内容：外国語として英語を教える教員のための英語指導法

English & Methodology for TESOL purposes (<https://www.qut.edu.au/study/qut-college>)

研修先：クィーンズランド工科大学

参加者：府立学校英語科教諭 5名

佐野工科高校	宮田 光美	教諭
箕面東高校	田中 陽子	教諭
箕面東高校	太田 朱里	教諭
大阪わかば高校	甲山 和歌子	教諭
かわち野高校	石原 麻友美	教諭

費用：* 研修費及び研修期間の宿泊費についてはクィーンズランド州が負担。

・研修費には授業料、教材費、フィールドスタディにかかる交通費を含む。

・ブリスベン市内のホテルに宿泊。

* 渡航費、旅行傷害保険代、大学通学のための交通費、食費等は参加者個人負担。

研修前及び研修後の流れ

（4月）府立学校へ周知・募集 → （5月）選考（作文・面接《日・英》） → （7月）事前連絡会 → （9月以降）公開授業

《大学でのTESOL※研修について》 ※TESOL：英語を母語としない人に英語を教える英語教授法

- 「教科書に載っているから」ではなく、「なぜこの学習者にこの文法が必要なのか」一つ一つの項目ごとに教える理由を考える。それには学習者の個々の背景知識や想像力が必要。そして学習者の特徴に合わせて教えることも重要。
- 4技能（聞く（リスニング）、話す（スピーキング）、読む（リーディング）、書く（ライティング））を教える際に、コミュニケーションに授業を進めるためには、どのような質問や確認の投げかけ方が生徒の学びに効果的かということが最後まで一貫した内容だった。
- 授業の趣旨は、効果的な英語でのコミュニケーションアプローチについて。教員は常に生徒たちに考えさせて発言させたり、自分たちで答えを導き出させたりすることが求められていると学んだ。
- 効果的なフィードバックについて学んだ。まずは生徒本人が自分の英語の活動を振り返り、現在地を確認。そして、更に力を伸ばすために次のステップを考える。教員と学習者が共働し、学習者が到達点と比べて今どこにいるか確認。現在地の確認ができればFeedback※とFeed-Forward※についてより深く考える。
※“Feedback”：今の状況とこれまでの状況との比較。 “Feed-Forward”：現在地からの次のステップへの説明、道しるべ。
- 授業において、教師から生徒へ質問を投げかけることは非常に重要。授業では、具体的な質問の例や質問をするタイミング、頻度などについて議論した。中でも、活動内容を説明したあと、生徒にこれから何をすればよいのかを確認させるための質問であるchecking questionは、生徒が教師の指示を聞くだけでなく、自分のこれからの行動を自分の言葉で確認することができる上、活動内容を理解していなかった生徒も他の生徒の回答を聞いて把握することができる。加えて、教員も生徒たちがこれから行う活動内容を把握しているかどうかの確認をすることができるため、とても有効。

《クイーンズランド州の学校訪問》

- 授業の生徒数は多くても20名程度、見学した4クラス中3クラスの授業に複数の教員が関わっていた。支援担当のスーパーバイザーからの説明では、支援担当職員は5名で母語が英語でない生徒への通訳を含む学習支援など多岐に渡った支援がなされていた。
- 先生の言うことを自身のパソコンを使って入力している生徒もいれば、ノートを取っている生徒もあり、さらには何もしていないように見える生徒もいて驚いたが、何もしていないように見える生徒が積極的に質問に答えている姿を見て、それぞれの特性にあった学び方を学校全体で保証していることが推測できた。
- 訪問した2校には、教員にアドバイスを与える専門スタッフが常駐しており、授業改善のための授業見学と研究協議を頻繁に行っていた。研究協議では、専門スタッフから教授法に関する専門的な知識や技術に基づいたアドバイスが受けられる。授業を行った教師、見学した教師のどちらにとっても授業力を向上させるための貴重な協議会になっていた。

《ホームビジット》

- ブリスベン郊外に住む5人家族のお宅にお邪魔した。お母様は小学校で日本語を教えておられ、日本への留学経験もあるとのこと。ご自身が語学の教員であるとのこと共通の話題も多く、英語の授業で役立てばと現地の広告や無料の雑誌などを集めておいてくださり、お土産として持たせてくださった。
- 今回の研修の担当者であるクイーンズランド州教育省の方のご自宅を訪問させていただいた。手作りのパンやロールパイ、ご家庭で採れたパイナップルなどもてなしてくださった。その後は近くのビーチやシーフードマーケットを案内下さり、オーストラリアでの日常生活について教えていただいた。

《今後に向けて》

- 環境があまりにも違ったため、この度の体験を以て学んだことが果たして大阪府の教育現場で活かせるのが私自身の最大の問いである。訪問した2校は潤沢な施設と人材を保有しており、授業など一人ではなされていなかった。最も印象深く実践が必要であると感じたことは「問いかけ方」。教師からの問いかけには様々な役割があると学んだ。これは授業以外にも日々のあらゆるコミュニケーションで活用したい。
- 授業での指示や質問、確認方法に関しては、改めて学びなおすことになり、今後の授業で活かしていきたい。一方で、学んだ内容をいかに大人数の授業に応用していくかが今後の課題。
- 主に英語でのコミュニカティブアプローチについて学ぶことができた。学んだ内容を活かして、これまで以上に生徒との英語でのやり取りや活動時間を増やし、英語を使う機会を作りたい。
- 日本では教員が説明して活動に移ることが多いが、教員の説明中に生徒へ投げかける質問の量に圧倒的な差を感じた。checking questionsが多用されており、質問することで生徒に考える機会を与えることになるので、生徒はアクティブにならざるを得ない効果的な手法。授業で行う一つ一つの活動を見直し、生徒に負荷がかかる活動にシフトしていく必要がある。
- 実践したいことは3点。①様々なwarmerを授業内で行いたい。授業で学習する内容やテーマに合わせてどのwarmer（授業前のウォームアップ）が最適か確かめていきたい。②checking questionを有効に活用していきたい。③文法について、意味・文の作り方・発音の順番で授業を展開すること、また、それぞれの場面でのどのような教材を活用すべきかを学んだ。文法を教える授業づくりに活かしていきたい。

※来年度も本事業を行う場合は、令和6年4月頃にお知らせする予定です。参加については是非ご検討下さい。

《問い合わせ先》

〒559-8555 大阪市住之江区南港北1-14-16 大阪府咲洲庁舎37階
大阪府府民文化部都市魅力創造局国際課（クイーンズランド州 教員研修担当）
TEL：06-6210-9312 FAX:06-6210-9316